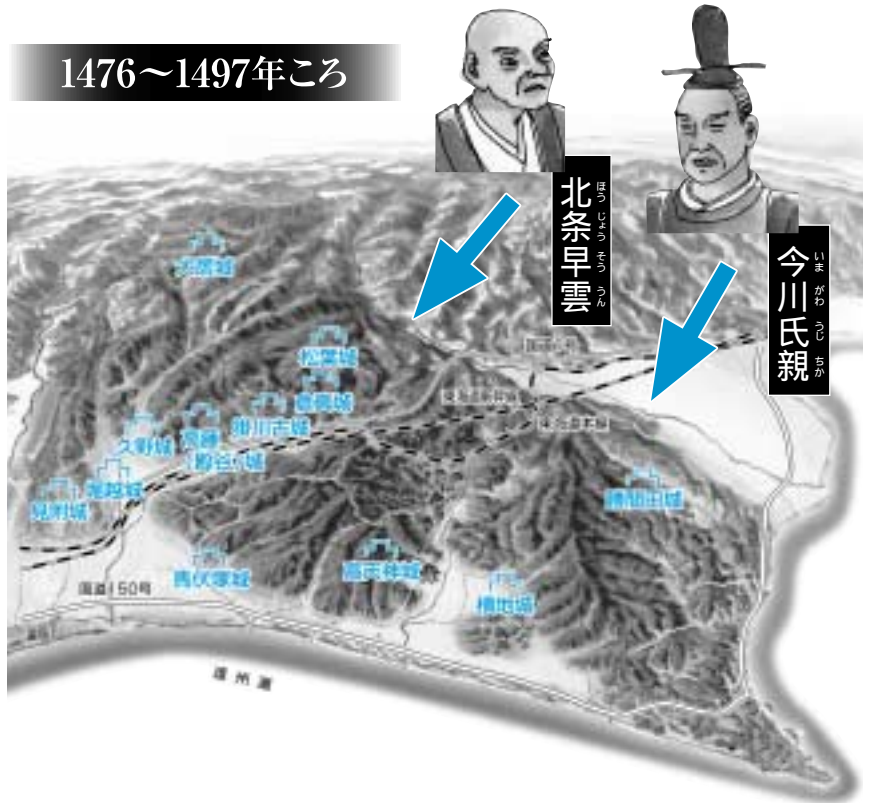


いつの時代も、天下を支配する将軍との関わりが深かった掛川

山内一豊までの掛川の武将たち — ③

今川氏の遠江支配

1413年から1446年ころ、中遠は斯波氏の領国でしたが、中遠一体に勢力を持つ遠江今川氏と緊張関係にありました。1465年、斯波氏は、横地・勝間田軍に、遠江今川系の狩野七郎右門尉を攻めさせ、それを滅ぼします。これに対し、1476年、駿河の守護今川義忠は、掛川古城を城内(第一小学校の北)につくり、見付城(磐田市)近くで横地・勝間田軍を破ります。しかし、今川義忠は横地城(菊川市)を落とし、駿河に凱旋して帰る途中、塩買坂(旧小笠町)で横地・勝間田軍の残党に討たれてしまいます。今川家の内紛もあり、今川軍の遠江攻略は一時頓挫します。しかし、1497年、今度は、今川氏親と伯父の北条早雲が同盟を結び、遠江に攻め込みます。高藤・殿谷に城砦を構えていた原氏、松葉城の川井氏、倉真城



の松浦氏を破り、遠江を支配します。氏親は、東海道および西遠防備の要所として、掛川古城を城郭化し、重臣の朝比奈泰濃を城主にして遠江全体に勢力を広げ、宿願の駿河と遠江の守護になります。今川氏の掛川支配は朝比奈氏三代の約70年続きます。

1554年、氏親の子、今川義元は、さらに勢力を広げ、駿河、遠江、三河の三国を支配する戦国大名となり、北の武田信玄と東の北条氏康と同盟を結びます。

1560年、天下を狙う今川義元は、京へ攻め上がる途中、桶狭間で織田信長に討たれてしまい、今川家は子の氏真が跡を継ぎます。この時、松平家の人質として今川軍に加わっていた家康が独立し、岡崎城に入ります。義元が亡くなると、今川家は弱体化し、徳川と武田軍の駿河への攻略が始まります。

1560年

今川義元は、桶狭間の戦いで織田信長に討たれてしまい、今川家は急激に弱体化していきます。

